

情報発信事業原稿

場 所 特別養護老人ホーム ラック

ご担当者 小島施設長、堀口部長、廣瀬フロアマネージャー

取材日 令和6年11月8日、令和6年12月9日

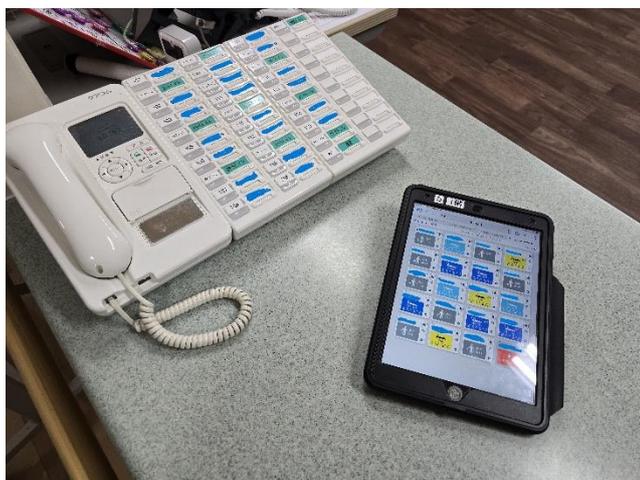
取材者 次世代委員会 伊藤 保智

テーマ ICTの導入、活用について

導入機器

★ナースコール（経年劣化にて入れ替え）

→他機器と連動できるものを選択



★a a m s /アアムス（見守り介護ロボット）

→全ての居室に導入（アアムス+見守りカメラ）、アアムスが反応すると所持しているPHSで知らされ、近くのPCやタブレットでその方の様子をカメラ映像で確認することができる。

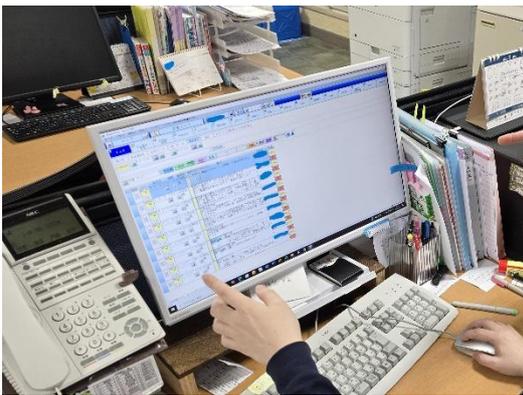
起きてみえたり、危険であれば訪室する。





★介護記録（ほのぼの）の電子化

→入浴や食事、排泄などの介護記録を PC やタブレットを使用する。今後1年未満で介護日誌も電子化する予定。すでに医務では電子化しているが、個々の入力方法に差が出ており、統一する必要がある。



取材内容

★導入しようとした経緯は？

ご利用者の事故防止（早期発見）、
職員の疲労低減（予防）
外国人職員の定着（現在4名就労中）
記録の統一化

★どのような準備をしましたか？

ICT 関連の委員長を決め、各ユニットから委員を出し、委員会を立ち上げた。いつから導入しどのように活用していくかを徹底的に話し合った。準備期間（活用方法や使用方法）を3ヵ月とし、開始日を決めた。メーカーからの取り扱い説明会を全職員が出席できるように、数回に分けて開催した。（アアムスやカメラ、介護記録の電子化は令和5年9月から開始）

★導入前の職員の反応はどうでしたか？

平均年齢が比較的若い（37歳）という事もあり、定着までスムーズだったとよく言われるが、若いからと言って機器が得意かというところでもない。

理解してもらう為、時には管理職が話す機会も設けた

★定着はスムーズでしたか？またその方法は？

委員会を中心にマニュアルを作成した。分かる職員が分からない職員に実際にやらせてみて、覚えていった。

★導入後、どのような良い変化がありましたか？

- ・見守り機器を導入した事で、夜間帯に歩く距離が少なくなったため、疲労が蓄積しにくくなった。
- ・職員の健康が維持されるようになった
- ・腰痛などの怪我也も少なくなった
- ・ご利用者の大きな骨折事故などはなくなった
- ・巡視する手間が省ける
- ・巡視中に他の場所が鳴っても、映像確認により優先順位を決められる
- ・ご利用者の状況に応じた訪室が可能となった（定時巡回により、寝ている方が目覚めてしまったりすることがない）。これにより特に夜間帯の業務の組み立てが大きく変わり、生産性向上に寄与している。
- ・ICT導入前には戻りたくない（導入前の負担と導入後の負担が大きく違う）と、現場職員から多くの声がある。

結果、体調不良で休む職員も減り、定着率の向上に繋がった。

★現在、または今後の課題はありますか？

- ・都度の入力が必要になるが、入力できない事もある。
- ・機器の故障ではないが、アプリの不具合がある。
- ・Wi-Fiが安定しない事があった。（現在はネットワーク環境を改善し、Wi-Fiを使用用途別に3つ設置している。）
- ・アアムス通知に頼りすぎて、「通知が来るまで訪室しない」「通知が来ていないから訪室しなくてもいい」といった思考になる職員も出てきている。

小話

ピュアット（ウルトラファインバブル発生装置）の導入

浴槽の中に、ピュアットを設置する事で、ウルトラファインバブルが発生。目に見えないほどの細かな気泡が汚れなどを浮かし取ってくれる物。実際にスキントラブルが減った事は事実としてあり、これを使用していない椅子浴に入っていた方がウルトラファインバブルの特浴に入ったら赤みが減った（体を洗わない事で、刺激が減っ

た) 現在は、明らかな汚れがない限りは、陰部も頭部も洗わず、入浴時にウルトラファインバブルのシャワーで対応している。ゆったり入浴してもらう事もでき、空いた時間を活用し、余暇活動や会議の時間にあてている。

